

中山間活性化推進事業

先進地視察事例に学ぶ

リポーター 石垣 一子さん(中山)

今年もまた米の豊作を喜ぶべきか、悲しむべきか複雑な心境を強くしながら新しい年を迎えました。私たち農家は秋の収穫が終わると同時に休む間もなく、次の年の収穫に思いを託して春作業の準備に取りかかります。

さて、人口十六億人を超える農業大国の中国では、二〇一〇年になると、食糧自給率が九〇%に落ち込み、食糧輸入国になると最近の新聞は伝えていました。このことを現在の日本に置き換えてみると、農産物の中で自給率が一番高い穀物でも三〇%がやっとのことです。

これらを地球規模で考えてみると、食糧自給は人口の増加に追いつけない現実があり、日本の自給率はこのままでよいのかと不安に感じるのは私だけではないと思います。農業を生活の糧としている農家の主婦の立場からも、これは大きな問題として受け止めているところです。

豊かな農業・農村を担い手に残すために

このような厳しい農業状況の中で、昨年十一月十一日から十二日までの日程で農家女性を対象にした視察研修(テーマ・農村女性起業の都市農村交流活動による中山間地域の活性化)が実施されました。私もそれに参加することができました。視察先は山形県西川町、大江町と岩手県東和町、花巻市でした。私は映画「となりのトトロ」で有名な宮崎駿さんが作った「おもいでポロポロ」の舞台になった山形に心がはせ、何かを感じ取ってきたいという気持ちで一杯でした。

西川町は山形市から西にある月山・朝日岳に挟まれた山深く細長い町、東北地方でも積雪が一番多く自然条件が厳しい町でした。耕地面積が少なく、高齢化率が高い町の農業は大変厳しいものでした



J Aの大型直売店「だあすこ」(花巻市)

割分担などが女性部の活動に明確に位置付けられ、四十品目が商品化されました。生協と契約による販売を中心にして五千万円以上の実績があるとのことでしたが、自分たちの加工活動と比較しながら大変興味深く学ぶことができました。

岩手県東和町では生活研究グループによる直売活動と、地域食材をメニュー化したレストラン経営の取り組みを会員と交流しながら楽しく研修することができました。また、花巻市ではJ Aの大型直売店とレストランなどの大規模経営の状況について伺いました。いずれの場合も、農家女性が主体的に生き生きと役割を発揮している事例には、これからの農村の将来に明るいものを感じずにはいられませんでした。

「私たち農家の女性たちが輝いていることこそ、地域を変えていく第一歩になる」そんなことを参加者は感じ取ったことだと思えました。「地域を活性化し、若者が生きがいとやりがいを持って農業を行ない、農村を誇りに思う」そんな地域づくりを目指していきたくて思いました。

大江町ではJ Aさがえ大江支所の加工活動を研修しました。生産から加工販売までの年間計画や役

が、ここに住んでいる人々が持っている力や特技、アイデアを地域活性化に上手に生かしているとお話を伺いました。町職員の提案から生まれた東北初の宅配便、月の自然水の販売作戦、そのほか体験農場と民宿・レストラン、「農業の達人制度」による担い手育成など、住民主役による施策展開に感心しました。